

# 名なし指物語

新美南吉

青空文庫



南のほうのあたたかい町に、いつもむつつりと仕事をしている、ひとりの年とった木ぐつ屋がありました。目はぞうのように小さく、しよぼしよぼしていましたが、それにひきかえ、鼻<sup>はな</sup>とてのひらが、人一ぱい大きく、そのうえぶかつこうでした。

けれど、そのぶかつこうな両手が、なんという、かつこうのよい木ぐつを、つぎつぎとつくったことでありましょう。まるで魔法<sup>まほう</sup>つかいの両手が、小さな生きものをうみだすように、つくったのでありました。

子どもたちは、いつも店先の日よけの下にしゃがんで、おじいさんの仕事を見ていました。あんまりうまくできあがるので、子どもたちは思わず、ため息<sup>いき</sup>をつくこともありました。

けれど、そんなに器用<sup>きよう</sup>にうごく手でさえも、うっかりして、あやまちをおかしたことがあったのでしょうか。なぜなら、おじいさんの左手には、名なし指がありませんでした。おじいさんがまだ、木ぐつ屋の小僧<sup>こそう</sup>だったころ、夜おそくまで、いねむりしいしい仕事をしていて、うっかりすべらせたノミの先が、きつと、その指を、とっていつてしまったのでしょうか。

「マタンじいさん。木ぐつ屋になるのは、むずかしいの。」

木ぐつ屋になりたいけれど、指を落とすのはおそろしいと考えていた、ひとりの子どもが、ある日、こういつてたずねました。すると、マタンじいさんは、

「どうして？」

と、ききかえました。

「おじいさんの名なし指、ノミで切っちゃったんでしょ。」

「うん、これかい。」

と、マタンじいさんは、左手をひろげて見せながらいいました。

「こいつは、ノミで落としたんじゃないよ。」

それを聞いた子どもたちは、今まで、そうだと思っていたことが、まちがっていたとわかって、ふしぎな気持ちにとらわれましたが、それとっしよに、新しい好奇心がわいてきました。

「じゃ、どうしてなくしたの。」

と、さつきの子が熱心ねっしんにききました。

「ふん。」

マタンじいさんは、口のあたりに、かすかなわらいをうかべながら、名なし指のない大きな手を、二度三度ひろげたり、げんこつにしたりしました。それから子どもたちのほうへ顔をむけて、

「おまえたち、手を出してごらんよ。」  
と、いいました。

子どもたちは、すこし不気味ぶきみになって、だれも出そうとするものがありませんでした。

「なんだい。どうもしやしない。」

そういわれて、さっきの熱心ねっしんな子どもが、そつとかた手をさし出しました。おじいさんは、その小さな手を大きな手でとって、

「そうだ。わたしが名なし指をなくしたのは、わたしのこの大きな手が、この小さな手のくらいのときだったな。今では、木の根っこみたいに、ごつごつになったけれど、そのころは、この手のように美しく、やわらかだった。」

といいながら、なつかしむようにマタンじいさんは、子どもの手を見つめていました。

「わたしが名なし指を、どうしてうしなったか、そのわけを聞かせてあげようかな。」

そういつてまた、ノミをにぎり、前かがみになって、木ぐつのあなをほりはじめました。

マタンじいさんも、五十年ほどいぜんには、ほつぺたの赤い、かわいい少年でした。そのころマタンは、北のほうの、古い小さな村に、たったひとりのかあさんの手で、そだてられていました。村にはリンゴの木がたくさんあつて、明るい夏には白い花がさき、村にはリンゴのかおりが、いっぱいに流れました。そしてその花が、寒いころになると、珠たまのような美しい実になるのです。少年のマタンが、ある日、道ばたで、一つのクルミをひろったのは、ちょうど、リンゴの実の熟うれるころでした。

「なんだ、つまんない。」

マタンは、ひろったクルミをすてました。なぜなら、そのクルミは、実がはいってない、ただのからだけでした。けれど、すててはみたものの、落ちているのを見ると、またほしくなつて、ふたたびひろいあげました。

へなにかにならないかしら」と考えながら、いろいろ、ひねくつてみると、左の名なし指の頭に、ちょうどうまく、かぶさつたのでした。

「ああ、ぼうしだ、ぼうしだ。」

マタンは、ひとりでおかしくて、ひとりでわらいました。そして、

名なし指、名なし指、

ぼうしかぶった名なし指、

たららん。

そんな、でたらめな歌をうたって、クルミのからのかぶさった名なし指を、まげたりのはいたりしながらやっていると、いかめしい石のへいの下で、女の子がひとり、しょんぼりすわっていました。

「おい、ジュリーちゃん、ごらんよ。」

といって、マタンは近づいていきました。

「ほら、この指が、おじぎするよ。はい、ジュリーちゃん。こんにちは。」

女の子は、クルミのからをかぶった名なし指におじぎされて、にっこり、ほほえみしました。けれど、その大きなみどり色の目は、なみだでうるんでいました。しかし、どうしてないているのか、マタンはきこうとしませんでした。なぜならマタンは、ジュリーのおかあさんが、病気でながい間ねていること、おとうさんは酒飲みで、めったに家へ帰ってこないこと、ジュリーはパンを食べないで、水ばかりでがまんすることもあること、たまに、よっぱらったおとうさんが家へ帰ってくると、ジュリーは家からおっぱり出されることな

ど、よく知っていたからでした。

きょうも、たぶん、おとうさんが家へ帰ってきて、ジュリーをおっぱり出したぐらいのことでしょう。マタンは、いつものように、ジュリーをなぐさめてやりたくまりました。けれどいったい、なんでなぐさめたいのでしょう。ビスケットでも持っていれば、たといそれが一つでも、半分ずつ食べることができるのでしょうか。

ふと、ふりあおいだマタンの目に、まっかに熟れたリンゴの実が、四つ五つ、うつりました。木は、石のへいの中にはえているのでしたが、実だけは、へいの上に見えているのでした。

マタンは、その一つをもちで、ジュリーにやろうと思いました。マタンはなぜ、そんなよそのリンゴを、もこうなどと考えたのでしょうか。家へ帰りさえすれば、庭にりっぱなリンゴが、ほしただけ実っていましたのに。マタンだって、よそのリンゴをもぐのは、わるいことだと知っていましたらうに。

けれど、ジュリーをなぐさめてやりたい気持ちがいっぱいで、そのほかのことを、考えるひまがなかったのでありましょうか。

「待つといで。」

そういつておいて、マタンは、車かじやのほうへ、かけていきました。車かじやの横には、たがのはまった古い輪わがたくさん、もたせかけてありました。そのうちの一つを、マタンは、ごろりごろりとまわしてきて、石のへいにもたせかけました。

白いずきんで、まるいほつぺたをつつんだジュリーは、マタンがなにをするか、だまつて見ていました。マタンは、もたせた車の輪わのこしきの上に、よじのぼりました。そして、リングのほうへ、手をのばしました。

「あ、いけないわ。」

ジュリーは、あわててさけびました。

「マタンちゃん、いけないわ。そんなことしちゃ。」

そして、マタンの右手をひっぱったのですが、そのときにはもう、マタンの左手は、一つのリングをつかんでいました。

へいの中ではさつきから、はさみを持ったお金持ちが、おじょうさんにかごを持たせて、色のよいリングをえらびながら、チョコキンチョコキンと切つてまわっていました。そして、マタンがリングに手をかけたとき、お金持ちはちようど、その木の下にいたのでありました。

「マタンちゃん、いけないってば。」

ジュリーが右手をひっぱりますと、マタンはひっぱられるままに、おりてきました。けれど、どうしたことでしょう。左手をおさえて、その場にしゃがんでしまいました。顔色は、まっさおでした。

「あつ、マタン。」

ジュリーは、ものにおびえたようにするどくさけぶと、前だれで顔をおおってしまいました。

「わたしの名なし指は、そうしてなくなってしまったのさ。」

といって、おじいさんはもう、かたほうのくつをつくりあげてしまいました。子どもたちは、大きく目を見はって、聞いていました。

「クルミのからをかぶったまま、なくなってしまったのさ。」

と、ひぎの上にたまった木くずを落としながら、おじいさんは、いいました。

「いたかったでしょう。」

と、ひとりの子どもがききました。

「いたかったさ。おまえたちなら、とびあがってなくな。」

「おかあさんにしかられやしなかった？」

と、ひとりの子どもがききました。その子は、外でけがをして帰ってくると、きっと、おかあさんにしかられるので、そんなことをきいたのでした。

「おかあさんにかい。しかられたな。よくしかられたな。けれど、しかったあとでおかあさんは、いつもわたしの手を胸<sup>むね</sup>におしあてて、かわいそうに、かわいそうに、だれがこんなかわいそうなことをしたのって、ないたな。」

「お金持ちのほうから、あやまってきたの。」

と、なかでいちばん年上の少年がききました。

「あやまっちゃこないさ。よその家のリングをとろうとしたのがわるいのだって、いつてたそうだ。」

子どもたちは、だまっしてしまいました。

なるほど、よその家のリングをとろうとしたのは、わるいことにちがいありません。けれど、一つのリングをとろうとしたからって、指を一本切り落として、それがあたりまえだといっているのは、あまりにざんこくであるとも考えられました。

「それで、その名なし指は、どうなっちゃったんでしょう。」

木ぐつ屋になりたい子どもが、いちばん前にしゃがんでいききました。その熱心なように、マタンじいさんは動かされました。

「まだ聞きたいのかい。それじゃ、聞かせてあげようかな。ちよつと、待つといで。」

もう、日が西のほうへうつっていましたので、マタンじいさんは、子どもたちの上にかぶさっていた日おおいの幕を、しぼりあげました。それから仕事台にこしをおろして、つぎのかたほうをほりはじめました。

マタンは小学校をおえると、木ぐつ師になりたいと思いました。ほんとうは、山の美しいスイスの国へいつて、ひつじ飼いになりたいというのがぞみでしたけれど、かなしいことに、それはあきらめねばなりませんでした。というのは、ひつじ飼いは笛を、うまくふかなきゃならないのだと、少年のマタンは思っていました。ところで、名なし指のないものに、どうしてうまく笛がふけましょう。

マタンが、木ぐつ師になりたいと思つたのにも、わけがありました。それは、ジュリーがおかあさんの木ぐつの古ばかりをはいて、歩きにくそうに、かっこかっこ歩き、すこし

いそいだりすると、木ぐつがとんでいってしまうのを、かわいそうに思ったからでした。マタンはじぶんで、ジュリーの足に、ちょうどよい木ぐつを、つくってやろうと考えたのでありました。

村からなんキロも去った、ある川口にのぞんだ大きな町には、りっぱな木ぐつ師<sup>し</sup>が住んでいました。少年のマタンは、その木ぐつ師<sup>し</sup>のところへ、小僧奉公<sup>こぞうほうこう</sup>にいったのでありました。

「指が一本ないからには、こいつあ、いい木ぐつ師<sup>し</sup>にやなれぬかもしれん。」

親方はそう思って、マタンの左手を、じぶんの手にとって見たのでありました。けれどマタンは、おどろくほど熱心<sup>ねっしん</sup>でした。仕事をするとき、その小さな目は、青い宝石<sup>ほうせき</sup>のようにかがやいていました。かべにかかったランプのしんが、たよりなく細く、きえかかってくるころまで、マタンは仕事場のすみで、こつこつ、仕事をしつづけました。

「マタン。もうねよう。」

と、親方のほうからいい出すのです。

「親方、おいら、まだねむくない。」

と、マタンは顔をあげていうのです。

「おまえの目はねむくなくても、ランプの目がねむいつてき。」

マタンが、はじめてじぶんの手ひとつで、木ぐつを「<sup>いつつ</sup>対ほりあげたのは、この町にき  
てから、三年後でありました。

はじめてつくりあげたもの。こんなになつかしく、こんな美しく、こんなによいものが、  
この世にあるでしょうか。マタンは、その木ぐつを胸<sup>むね</sup>にだきしめたり、両手にそろえての  
つけ、その手をいっぱいのばして、首をかしげてみたり、夜はまくらもとにきちんとなら  
べておき、それでもなお、ネズミにひかれはしないだろうかなどと、心配したのでありま  
した。

「ジュリー」と名前をほりつけて、マタンははじめてつくったその木ぐつを、村のジュリ  
ーのところへ送ってやりました。

きつとジュリーは、なみだをこぼして喜んだことでしょう。長いお礼<sup>れい</sup>の手紙が、マタン  
のところにとどきました。

「マタンちゃんをつくったものかと思うと、足にはくのが、もったいないような気がしま  
す」とか、「市日と祭日と、日曜日に教会にいくときしか、はかないことにします」とか、  
「マタンちゃんのお手々のように、大切にします」とか、そんなことが長々と書いてあつ

て、「ありがとう、ありがとう」が、なん度もくりかえされてありました。

けれども、市日や祭日にはいてるばかりでは、木ぐつもなかなか、すりへるものではありません。それから三年もたったある日、マタンのところへとどいたジュリーの手紙には、こんなことが書いてありました。

「マタンちゃん。どうしましょう。あたしの足が、すこしずつ大きくなるのに、あの木ぐつは、大きくなってくれません。きのうもがまんして、教会まではいていきましたら、豆まめつぶが二つ、できてしまいました。」

「おお、かわいそうに。おいらは、ジュリーのあんよが大きくなることを、すっかりわすれていた。」

もうそのころは、ひとかどのりつぱな職人しよくにんになつていたマタンは、さつそくふしない、まさめのよい木をえらんで、新しい木ぐつをつくりはじめました。そして、それができあがつたとき、親方から、ながかった奉公ほうこうのおひまをいただきました。

「マタン。おまえがはじめて、わしの店へやつてきたとき、わしはおまえの手を見て、指が一本かけているんでは、まあ、ろくな職人しよくにんにやなれまいと思っていたが、おまえは一生けんめいに仕事をはげんで、今じゃ、親方のわしより、よいうでになつてしまった。

わしはおまえを手ばなすのが、おしくてたまらない。」

親方はそういつて、たくさんの金かねをマタンにあたえ、わかれをおしんでくれました。

マタンは、お金と木ぐつを大切に身につけて、川のふちのにぎやかな町を去ったのであります。それは秋のすえごろのことで、はだ寒い風が東からふき、野には人のかげさえ見えず、マタンはさびしさを感じながら、けれど、心のおく深いところには喜びをわきたせつつ、いそいそと道をたどっていきました。いくつもいくつもの、丘おかを通りすぎました。どの丘の上にも、四本の手をもった風車が、はてしない秋の空の下にあつて、キリキリとまわっていました。そして、風車の手によつてまねきよせられるように、雲は東の地平から、つづれ綿わたのように流れ出してきて、いずこともなく流れ去っていきました。

一つの風車の下を通りかかると、風車のかげから、ひとりの男があらわれました。

「もしもし。」

と、その男は、マタンによびかけました。

「旅のお方のように、ゆくさはどこかね。」

マタンは、顔のつるりとしたその男を、なんて、いやな感じのやつだろうと思いました。正直に、これから帰っていかうとしている、じぶんの村の名をつけました。

「え、そうかね。」

と、男はさも、うれしいことを聞いたというようすでいいました。

「そいつは、さいわいだ。じつはわたしも、その村へ帰っていくところです。旅は道づれとかいいます。では、ごいつしよにお願いしましょう。」

「あなたは、どこの人ですか。」

「わたしは、その村生まれですよ。」

「え？」

マタンは、もういっぺん、その男を見なおしました。けれども、ちつとも、見おぼえない男でした。するとその男は、マタンの心にわいたうたがいを、ちゃんと知ってるというように、

「生まれは生まれだが、なにしろ、三十年もまえに、あの村をどび出したつきりだから、村のことは、あんまり知りませんね。わたしの知らない人も、たくさんできたことでしよう。」

と、ぺらぺらいうのでした。そしてふたりが、だまったまま、しばらく歩いたあと、

「三十年もまえにとび出したんだから、ひよつとすると、あなたのおかあさんがわかかつ

た時分<sup>じぶん</sup>を、知ってるかもしれませんね。おかあさんのお名前は？」

と、男はききました。

マタンは、興味<sup>きょうみ</sup>がわいてきました。

「わたしのおかあさんは、ローザといいます。」

「ローザ？」

とつぶやいて、男はなにか、遠いむかしのことを思い出そうとするように、考えこみました。そして、しばらくすると、

「あ、そうだ。思い出しました。思い出しました。ローザ、ローザ。」

と、なつかしむようにいって、マタンの亜麻色<sup>あま</sup>のかみが、ぼうしのふちからのぞいているのをちらつと見て、

「あなたのおかあさんは、亜麻色<sup>あま</sup>のかみをしていきましょう。」

といいました。

「いいえ。金髪<sup>きんぱつ</sup>です。」

と、マタンは答えました。すると男はあわてて、

「ああ、そうそう、金髪<sup>きんぱつ</sup>でした。そういおうと思っていて、うっかり、まちがったこと

をいつてしまいました。」

と、いいわけをしました。そしてこんどは、マタンの目の小さいのを見て、

「あなたのおかあさんは、小さい、かわいい目だったと思いますが。――」

といつて、こんどはまちがつていないだろうというように、マタンの顔を見つめました。

「そんなことは、ありません。ぱつちりした大きな目です。」

と、マタンは答えました。

「あ、そうそう。大きな美しい目でした。そういおうと思つていて、つい、まちがつたことをいつてしまいました。わたしの口は、きようはどうか、へんになっていますね。」

と男は、そんなふうに、ごまかしました。そしてさいごに、

「あなたのおかあさんは、世界にふたりとないほど、やさしい、よいおかあさんでしょう。」

といいました。

なるほど、それにちがいありませんでした。マタンにとっては、おかあさんほどやさしい人は、世界じゆうに、ひとりもありませんでしたから。

だれでも、じぶんのおかあさんをほめられれば、うれしくなるにきまっています。マタ

ンはこうして、その男を信用してしまいました。

そこでふたりは、その日の夕方たどりついた道ばたの宿屋やどやに、いっしよにとまることになりました。一日の旅につかれてしまったとみえて、相手の男は、床とこにもぐりこむとすぐに、大きないびきをかきはじめました。そこでマタンも、それに負けないつもりで、大いびきをかきはじめました。ところが、ほんとうにねむってしまったのはマタンだけで、つれの男はさいしよから、うそのいびきをかいていたのでありました。

ま夜中のころ、宿屋やどやのまどを、中からおしあけて、こうもりのように、ひらりとびおりた人かげを、銀ぎんのフライパンのようなお月さんは、高いところから見ただけでありました。その人かげは、明るいところをおそれるように、いけがき、やぶ、馬小屋、へいのかげなどの暗いところをもとめながら、ひらひらと見えかくれしていましたが、やがて、森の深いやみの中に、すいこまれるようにきえていってしまいました。

朝になってマタンは、木ぐつとお金とは、つれといっしよになくなっていることに気がつきました。世の中には、なんというひどいやつがいることでしょう。せつせと長い間はたらいで、あせとあぶらのかわりにえたとうとい金を、悪魔あくまのように、こっそりとぬすんでいくなんて。

しかし、なくなってしまったものを、いつまでもなげいているのは、おろかなことでした。マタンはまだ、宿賃やどちんをはらってありませんでした。それは、わずかな金ではありませんでしたが、どろぼうがすっかり、うばっていつてしまった今、そのわずかな宿賃やどちんも、はらうことができませんので、マタンは一策さくを案じ出して、宿屋やどやの主人からノミとツチを借り、木ぐつをつくって、金のかわりに、それではらうことにしました。

やせつぼちの主人の木ぐつ、気球のように大きな腹はらをしたおかみさんの木ぐつ、それから、小さいかわいい娘むすめさんの木ぐつ、そう三足をつくってやると、主人は大喜びで、もうこれでけっこうですといいました。

ところがこの村には、木ぐつ屋がなくて、村のお百姓ふじゅうさんたちが、たいへん不自由ふじゅうしていたので、宿屋やどやにとまっている、じょうずなわかい木ぐつ屋のうわさを聞くと、われもわれもと、木ぐつの注文をしに、やってきたのでありました。

夕方になつても、仕事はかたづきませんでした。そこでマタンは、もうひとばん、その宿屋やどやにとめてもらうことになりました。夜がふけてねるときになると、マタンは宿屋の主人にいいました。

「ゆうべのへやは、わたしひとりには広すぎるから、ほかにもっと、小じんまりしたへや

があつたら、うつらせてください。」

「いいですとも。ちようどさつき、ろうかのつきあたりの、小さなへやがあきましたから、あそこへうつりなさい。」

と、主人はいつて、ローソクをマタンの手にわたしました。マタンは「お休み」をいつて、教えられたろうかのつきあたりのへやへ、やっていきました。

天じょうのひくい、まどの一つついたその小さなへやの中で、マタンはねるまえに、まだしばらく仕事をしました。カシの木のはめ板に、コオロギが一ぴきとまつていて、マタンに話しかけるように鳴いていました。

さていよいよ休もうと思つて、マタンがテーブルの引き出しをあけ、その中へ、ノミとツチをしまおうとしたとき、マタンは引き出しの中に、ふつくらとふくれたさいふを一つ、見つけたのでありました。

思いがけないことでした。マタンは、ぼんやりしてしまいました。だれのさいふでしょう。ゆうべこのへやにとまつた人が、あわててわすれていったものでしょうか。ならばマタンが、このさいふをもらつてしまつたら、どうなるでしょう。だまつて、じぶんのふところへ入れてしまえば、それまでのことではありませんか。いや今にも、わすれていつた

人がひきかえして、さいふをとりにくるかも知れません。今からすぐまどをおしあけ、にげてしまえばよいのです。

ぼんやりと、さいふに目をおとしているマタンの頭の中で、たくさんの声が、いろんなことを、めまぐるしいほど、しゃべりあいました。はめ板から、ゆかに落ちたコオロギまで、なにかいつているようでありました。

「それはわるいことだ。それはわるいことだ。」

と、コオロギはうたっていました。するとマタンの頭の中で、一つの声が、

「この世じゃ、みんながわるいことをするのだ。おまえも、ひとに金をぬすまれたのだから、こんどは、ひとの金をぬすんでやるがいいのだ。」

と、ささやきました。

「そうだっ。」

と、マタンは思いました。そこでマタンの左手が、さいふの上におずおずとのっかりしました。

コオロギは、だまってしまいました。ローソクのほのおは、油のようにすんでしまいました。さつきまで、カルタでにぎわっていた台所のほうも、もう、ねしずまっていました。

チヨロチヨロと、小川の水の流れる音だけが、この深いしずけさの中から聞こえてくる、ただ一つのものでありました。

マタンの左手が、ちようど、引き出しの中のさいふの上におおいかぶさったとき、かれは、コツコツとたたく音を聞きました。それは、すぐやんでしまいました。マタンは、空<sup>そ</sup>耳<sup>らみみ</sup>だったのだと思って、さいふを手にとろうとしました。すると、またしても、コツコツとたたく音がしました。だれがどこを、たたいているのでしょうか。ドアをノックしているようでもありませんし、まどを外からたたいているようにも、思えませんでした。だれかまだ、こんな夜ふけに、起きていたのでしょうか。

マタンは、じぶんの周囲<sup>しゅうい</sup>を、そつと見まわしました。火のない炉<sup>ろ</sup>、炉棚<sup>ろだな</sup>の上の古いさら、天じよう、黒いふしあな、かべにえぐられたくぼみの中のキリストの像<sup>ぞう</sup>、かべとゆかのさかいで、二つにおれているじぶんのかげぼうし、かげぼうしの横にいる鳴かないコオロギ、それからそれへと、目をうつしていきました。それらのものは、無言<sup>むごん</sup>のうちに、マタンのしようとしていることをとがめていましたが、いったん、マタンがそのことをしてしまつたら、そのことはひみつにしていってやるよと、約束<sup>やくそく</sup>しているようにも思われしました。そこでマタンは、三度、さいふをとろうとしました。すると、またしても、コツコツ

と、たたく音が聞こえたのでありました。

「だれだろう。」

マタンは、じぶんにつぶやきました。するとマタンの耳に、答えるものがありました。

「わたしです。」

「わたし？」

マタンは、びっくりしました。

「わたし？ わたしってだれだ。」

すると、その声が答えました。

「わたしは、名前がありません。わたしは生まれたときから、名前なしでした。」

「そんなへんてこな話は、ありやしないよ。ネコだって、プスとか、ミイト、名前をもつ

ているもの。」

と、マタンはいいました。

「ほんとうに、へんな話です。わたしには、四人のきょうだいがありました。かれらはみんな、それぞれ、名前をもっていました。わたしだけ、名前がありませんでした。」  
と、声はいうのでした。

「きみは、ドアの外に立っているのか。さつきから、ノックしていたのはきみか。」  
と、マタンがききました。

「わたしはさつきから、ノックしていました。」  
と、声は答えました。

「けれど、わたしは、強くノックすることができません。四人のきょうだいたちと、いっしょにするときは、もっと強く、ノックできるのですけれど。」

「ところできみは、今じぶん、こんなところへなんの用事があつてきたのだ。」

(未完)

# 青空文庫情報

底本：「新美南吉童話全集 第一巻 ごんぎつね」大日本図書

1960（昭和35）年6月20日初版発行

1975（昭和50）年5月10日31版発行

入力：江村秀之

校正：足田みどり

2017年1月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 名なし指物語

新美南吉

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>